

令和4年(2022年)度 受賞者

高円宮殿下記念地域伝統芸能賞

岩国行波の神舞保存会

地域伝統芸能大賞 保存継承賞(第1類): 地域伝統芸能の実演に係わる団体又は個人

富田人形共遊団

地域伝統芸能大賞 活用賞(第2類): 地域伝統芸能を活用した行事の実施主体

奥州市江刺鹿踊保存会

地域伝統芸能大賞 支援賞(第3類): 衣装、用具等の製作、人材等の確保に係わる団体又は個人

川邊 志津枝 氏

地域伝統芸能大賞 地域振興賞(第4類): その他特に顕著な貢献のあったもの

土佐絵金歌舞伎伝承会

地域伝統芸能奨励賞

朝倉梯子獅子青年会

第30回地域伝統芸能全国大会記念特別賞

三作神楽保存会

銀鏡神楽保存会

のんこの諫早まつり振興会

長浜曳山の名工

橘ひょっとこ踊り保存会

島根県立浜田商業高等学校 郷土芸能部

受賞者 プロフィール

高円宮殿下記念地域伝統芸能賞

いわくにゆかば かんまいほぞんかい

岩国行波の神舞保存会

(山口県岩国市 岩国行波の神舞)



岩国行波の神舞の起源は寛文8年(1668)以前とされ、式年祭は寛政3年(1791)から始まり、足掛け7年目ごとに絶えることなく行われています。

もともと神官が主体の社家神楽でしたが、明治4年(1871)の太政官布告で神官による神楽奉納が禁止された後は、里人によって神楽が継承され今日に至り、現在は保存会と地域住民が一体となり古くから受け継がれてきたこの伝統文化を継承しています。

式年祭では、当地河川敷に神殿を設け、一昼夜半をかけて全十二座と八間の舞を奉納するほか、毎年10月中旬の秋季例祭では、地区の鎮守・荒玉社の境内でその一部を奉納します。

こうした伝統的神事の継承に加え、岩国市における伝統芸能の保存と地域文化の高揚のため毎年開催される「岩国民俗芸能まつり」にも継続的に出演しています。

式年祭は、神事であるものの観光客をはじめ非常に多くの方が来観に訪れ、当地河原が来観者で埋め尽くされ、「岩国民俗芸能まつり」も市内内外から多くの愛好者が訪れる行事であり、神舞の保存継承活動を通じて地域の観光振興に大きく貢献しています。

地域伝統芸能大賞 保存継承賞(第1類): 地域伝統芸能の実演に係わる団体又は個人

とんだにんぎょうきょうゆうだん

富田人形共遊団(滋賀県長浜市■富田人形)



富田人形は琵琶湖北東に位置する長浜市富田町の20戸ほどの集落に江戸時代から伝わる人形浄瑠璃で、3人で人形遣いを行い、三味線を用いて演じます。

起源は天保6年(1835年)にこの地に興行に来た阿波の人形芝居の一座が大雪に見舞われ興行が成り立たなかったため、旅費の代わりとして宿に人形を置いて帰りました。■その後村の芝居好きの人々が集まり、その人形を使って浄瑠璃の稽古を始めたのが起源とされています。以来、富田の人々はこの人形を受け継ぎ、地元のお寺などで披露してきました。

明治7年に滋賀県の興行許可を得て「富田人形共遊団」として活動を開始し、父子相伝で継承しました。近隣の村でも公演を行うなど地域内外で愛されてきましたが後継者不足により、活動は一時低迷しました。危機感を感じた青年たちが富田以外の人も入れる形に変え、昭和54年に新生「富田人形共遊団」として活動を再開しました。

現在では地元の小中学校を始め、県内外の学生に講座を行い、さらには海外からの留学生も受け入れて保存・継承に努めています。



一般財団法人

地域伝統芸能活用センター



おうしゅうしえさししおどりほぞんかい

奥州市江刺鹿踊保存会

（岩手県奥州市 江刺鹿踊り「百鹿大群舞」）

奥州市江刺鹿踊保存会は、江刺地域の鹿踊 14 団体によって結成されています。

「百鹿大群舞」は昭和 60 年、東北新幹線水沢江刺駅の開業を祝って「他に類を見ない鹿踊団体数を生かして統一した踊りを」と、検討と練習を重ねて誕生しました。

江刺の鹿踊団体は大きく分けると 2 流派あり、行山流と金津流では踊りも口唱歌も異なっており、どの団体もそれぞれの踊りの確実な伝承に尽力してきた中で、流派を超えて 1 つにまとまろうとしたことはとても大きな驚きです。一般的に、鹿踊が次代に相伝された際は、先代への感謝と歴代踊り手の供養のため「供養碑」を建立しますが、「百鹿大群舞」の創設にあたって供養碑が建立されており、その大きな決意が伺えます。

以降、毎年練習を重ね、「百鹿大群舞」は江刺地域のおまつり「江刺甚句まつり」「江刺夏まつり」での披露はもちろんのこと、大銀座まつり・国民文化祭・大阪御堂筋パレード、天皇陛下御即位 10 年奉祝パレード、天皇陛下御即位 20 年奉祝パレード、天皇陛下御即位をお祝いする国民祭典奉祝パレードへの参加など、全国的な活動を展開し鹿踊を後世に残す取り組みを行っています。



かわべ しずえ

川邊 志津枝（島根県 石見神楽の衣裳の製作）

川邊氏は 16 歳のころ衣裳製作の道に入り、昭和 49 年に自身の衣裳店である「福屋神楽衣裳店」を開業しました。以降、約 45 年に渡って神楽団体からの様々な依頼に対応した衣裳を製作し、石見神楽の振興に貢献しています。

また技術の継承にも取り組み、これまで 2 名の従業員が島根県から「ふるさと伝統工芸品技能表彰」を受けるなど後継者育成にも尽力しています。



とさえきんかぶきでんしょうかい

土佐絵金歌舞伎伝承会（高知県 土佐絵金歌舞伎）

高知県香南市赤岡町に残されている芝居絵屏風（高知県有形文化財）の歌舞伎を実際に演じてみようとして結成され、平成 5 年 7 月に初めて「第 17 回絵金祭」で上演しました。土佐絵金歌舞伎伝承会が発足して今年で 30 周年となり、土佐絵金歌舞伎伝承会が中心となり香南市より指定管理を受け運営している弁天座も今年で会館 15 周年を迎えます。

コロナ禍で絵金祭が 2 年に渡り、中止になったものの絵金祭での定期公演は今年で 28 回目を迎えます。

文化財に着目した珍しい企画は話題を呼び全国から観光客が訪れており、海外で開催されるジャパンウィークや他県に積極的に公演に行っています。

地域の伝統芸能を活用し、香南市を歌舞伎の町として定着させたことは地元の活性化に貢献しています。

朝倉梯子獅子青年会（愛知県 朝倉の梯子獅子）



朝倉の梯子獅子は、慶長3年（1598年）、朝倉村で農作物を荒らす、イノシシを農民が梯子攻めにして退治し、翌年は大豊作になったことから、イノシシを供養するため、梯子に登る獅子舞を演じたのがきっかけで、約420年間伝承されている民俗芸能です。

朝倉梯子獅子青年会は、知多半島朝倉地区の氏神である牟山神社の大祭において、梯子獅子の舞を欠かすことなく奉納するため、演技技術の伝承・保存及び継承者の育成取り組んでいる高校生から24歳までの若手の集まりです。梯子獅子の演技習得に当たっては危険とも隣りあわせのため、厳しい練習を行い、地域の伝統文化の継承に取り組んでいます。また大祭以外に、知多の産業まつりや愛知万博のほか、NHKホールでの地域伝統まつり、さらに平成25年の伊勢神宮式年遷宮でも獅子舞の奉納を行うなど、朝倉のPRと地域の振興に大きく貢献しています。

第30回大会記念特別賞

三作神楽保存会（山口県周南市 三作神楽）



三作神楽は、山口県周南市北西部の和田三作地区（林・原赤・中村の3自治会を合わせて三作という）に古くから伝承され、7年目ごと（卯年・酉年）の式年祭で地元河内社に奉納されてきました。

その起源については定かではありませんが、明らかな資料としては、明和元年（1764年）の墨書のある面が残っていました。

言い伝えによると大宝年間（約1300年前）に大飢饉があったとき、この地方にも五穀が実らず、疫病が発生し、村人は草や木をかんで飢えを凌ぎ、多くの死者をだした村は悲しみの声で満ちていたと言います。この苦難から逃れようと河内社に五穀豊穡と疫病退散を一心に祈願したところ、翌年からは作物が実り病氣も癒えた村には再び平和が訪れました。村人はそのお礼として、3村村民総出で力を合わせて神楽を奉納するようになった」と地元には伝えられている。

式年祭で神殿を設け神迎えをして23の神楽舞を奉納するこの神楽は神祭りの一つの古風な形をとどめ、中世の華やかな芸能を取り入れて祭りの興奮を高めています。

昭和62年に山口県の、無形民俗文化財に指定され、平成12年には国の重要無形民俗文化財に指定されました。

また、三作神楽保存会は昭和45年に発足し、地元三作の全世帯を会員として「神楽を永久に伝承すること」を会の目的としています。後継者育成にあたっては、昭和53年頃から子ども神楽教室の開催、周南市立和田小・中学校での指導を行い、和田中学校閉校後は、富田中学校で三作神楽クラブの設立と活動を支援するなど、三作地区に限らず積極的にを行っています。

銀鏡神楽保存会（宮崎県西都市 米良神楽）



銀鏡神楽は山岳信仰を基層に持つ夜神楽です。

元々は修験者によってもたらされたものですが、その歴史は古く、銀鏡神社が創建された長享3（1489）年には、既に霊峰龍房山麓にあるイチイガシの巨木の下で舞われていました。さらに、天和（1681～1684）年間に銀鏡神社社家の濱砂淡路守重賢が鶴戸山道場（現鶴戸神宮）から持ち帰った「鶴戸神楽」と「鶴戸鬼神」が従来の神楽に大きく影響を与えて、現在の舞様式になったと言われます。普段は集落各所に御神体として祀られている「面様（御神面）」を着用しての「降居神楽」や、唯一神道の影響を受けた所作や問答が多い点等の特徴とします。また、大祭で「御贄」として数多く供えられる猪頭や、猪狩りを表現した「ししとぎり」等はこの地域の焼畑・狩猟習俗をよく伝えており、民俗学上貴重なものです。

西都市内の神楽継承団体（銀鏡・尾八重・穂北・高屋・神代神楽保存会）は、国文祭・芸文祭みやざき2020を契機に『西都「まっぽす」神楽』を結成して「神楽の魅力発信」と「地域活性」に尽力しています。銀鏡神楽保存会はその伝統と経験を生かして、同組織の牽引役を務めています。



いののこ諫早まつり振興会

(長崎県 諫早のいのこ節踊り)

「諫早のいのこ節」の歴史は江戸時代の参勤交代での出来事が始まりだと言われています。

諫早の藩主が江戸参勤交代で箱根の関所を通過中に関役人は不覚にも居眠りをしていました。

関所を通るときは大鳥毛・槍などの道具類を45度以上前方へ傾けるのが決まりでしたが、役人の声がかからないので、道具を傾けずに通過していました。ところがこれに気付いた役人が「天下の関所を立て道具のまま通るとは何事ぞ。早々に引き返せ」と怒鳴りましたが、行列の最後尾にいた足軽頭の小柳与右衛門が肩衣を脱ぎ、関所の玄関にわらじのまま片足を踏んで「なぜ通らぬ前にとがめない。行列を引き返せというなら職務怠慢のその者らがまず腹を召されよ。さらば行列を戻そう」と啖呵を切ると、役人は言葉につまり、行列は関所を通過しました。関所から数キロ離れた所で一行は道端の芝生に腰をおろし「立て道具のまま関所を越えたのは吾が藩のみぞ」と言って酒盃をあげたそうです。その時に歌心ある藩士が即興で「芝になりたや箱根の芝に、諸国大名の敷芝に」と歌ったのが「のいのこ節」の元唄になったと伝えられています。

本番祭1日目の「のいのこ街踊り」には、約60団体が参加、参加者総数は毎年増え続け、7千名近くに登ります。期間中は延べ10万人もの人出で賑わいます。

ながはまひきやま めいこう

長浜曳山の名工 (滋賀県 長浜曳山修理技術者)



辻 清氏(金工師)、樋口 安彦氏(塗師)、渡邊 嘉久氏(塗師)は、長年にわたり、国の重要無形文化財である、長浜曳山祭の曳山の金工品や漆工品の修理に携わり、技術を継承するとともに独自の作品も制作しています。

その技術は専門家から高く評価されています。地域の貴重な文化財の保存活動のほか、長浜以外の曳山や社寺の修理にも携わるなど広域的に伝統文化の継承に貢献しています。

橋 ひょっとこ踊り保存会

(宮崎県 永田のひょっとこ踊り)



「永田のひょっとこ踊り」は、明治期より日向市の塩見永田地区に伝わる民俗芸能で地元の眼科医であった橋公行医師によって考案され、その後、地域の有志でつくる保存会により、今日まで継承されています。

昭和59年に始まった「日向ひょっとこ夏祭り」は毎年8月に開催されており、当初は27団体、500人に満たなかった踊り手は毎年徐々に増え続け現在では119団体、2200人が参加し、7万人の観光客が見物に訪れます。

保存会は地元の小学生や市民に踊りの指導、模範披露、審査員を努める等、ひょっとこ踊りの保存、継承に努めています。

しまねけんりつはまだしょうぎょうこうとうがっこうきょうどげいのうぶ

島根県立浜田商業高等学校郷土芸能部

(島根県 石見神楽)



平成17年に創部し、地元を始め県内外で年間20数回の公演実績があります。また全国高等学校文化連盟の推薦を受けて海外での公演を通じて島根の魅力を発信しています。

平成18・20・21・22・24・25・26・27・28・29・令和元年、3年に全国高等学校総合文化祭に出場。(平成22・24年に優良賞、令和3年に優秀賞・文化庁長官賞を受賞)令和4年も出場予定です。

第32回全国高等学校総合文化祭かの開会式では秋篠宮・同妃並びに眞子内親王殿下の御前で公演も行っています。